

地域の歴史をひも解く 3つの陶板

香川大が所蔵・展示している3つの陶板をヒントに時を遡り、
地域のかつての暮らしや出来事を垣間見てみましょう。



高松城下図屏風 展示場所: 大学本部大会議室

高松城下図屏風

幸町キャンパスの大学本部大会議室の扉を開けるとすぐに目に飛び込んでくるのは、正面の大きな陶板画。それは、17世紀半ば、松平家初代・頼重の頃の高松城と城下町の様子を描いた屏風の陶板です。高松城は1587年に讃岐の領主となった生駒親正が翌88年に築城を始め、90年に完成。3代藩主正俊の頃には丸亀から商人たちを城下町に移して丸亀町とするなど、城下町の整備も進んでいきました。その後の生駒騒動により生駒家は出羽国に転封。現在の高松城の遺構は、生駒家に代わって水戸から入封した松平頼重が改修した姿を伝えています。

屏風図は北西の方向から見た城内の建物や城下町をきわめて精緻に描く鳥瞰図で、3重4階の天守と本丸・二の丸を囲む内堀から、三の丸や西の丸を囲む中堀、武家屋敷街を囲む外堀まで、三重に巡らせた堀がよくわかります。外堀に設けられた舟入の西側は藩の船倉、東側は商人用の東浜港で、藩の御座船などが停泊している様子。深い青で描かれる瀬戸内海も印象的です。外堀と内堀の間には藩主一族や家臣たちの武家屋敷があり、南側の堀端から片原町・兵庫町、南北に伸びる丸亀町といった商人街が広がります。その両側は大工町・外磨屋町・紺屋町・鍛冶屋町といった職人街。さまざまな職業の人々や店舗が書き込まれ、にぎわっている様子が伝わります。城下の南部を東西に横切る溝は寺院が立ち並ぶ地域。また、城下南西の外れに描かれているのは石清尾八幡宮の社叢でしょう。城の東側で大きく湾入する海、周辺の漁村や塩田の風景など、当時の生き生きとした景観がうかがえる、貴重な資料です。



志度寺縁起図 展示場所: 医学部附属病院

志度寺縁起図

三木町医学部キャンパスの附属病院の吹抜けエントランスには、志度寺縁起図の陶板が展示されています。

志度寺縁起図の原画は、横1.5米、縦3米の大きな絹布に絵具を用いて描かれており、全部で七幅あったものが一幅は失われ現在六幅が志度寺と東京国立博物館に分けて保管されており、明治34年に重要文化財に指定されています。

これらの七幅の縁起図は、志度寺の本尊創立の由来、修復の由来などをそれぞれ書いてあり、本院の壁画に用いさせていただいた阿一蘇生図は修復の由来を描いたもので、七番目のものです。

これらは説話画といわれるもので、説話すなわち説明文が別に付いております。絵の内容となつて説話は、時間と場所を変えて次々と起こつてゆく物語で、これを二幅の絵に描いているため同一人物が違った姿で何回も出て参ります。本院の壁画でも阿一は二回出ております。

このような説話画は全国に相当数存在しますが、志度寺縁起はその中でも、古いこと、絵が優れていることなどで非常に優れた代表作といわれて、よく研究の対象となり、展示され、書物に掲載されております。

絵の内容は、三木町井戸の住人阿一が58歳の時に重病になり意識を失い、夢の中で志度寺に参り志度寺修復のために勧進することを老僧に誓い、意識が回復した。その後も一度阿一は重病にかかり、今度は閻魔大王に会って、更に同様の誓いをするのですが、この後段の部分は本院の壁画からは省略しました。この

源平合戦絵図

幸町キャンパスの博物館に収蔵されているのは、日本画家、源平合戦絵図の陶板です。

平家追討に向かう義経一行が勇ましく駆け抜けていく様が見事に描かれています。右に五剣山、左に屋島を背景に牟礼の浜に向かっている姿と思われまします。今もお変わらぬ源平合戦の舞台となった景色から古に思いを馳せます。

時は平安時代末期の1185年2月19日、讃岐国屋島の合戦がまさに始まろうとしています。源平合戦(1182~1194)の明治5年(昭和15年)は、東京生まれで、はじめ吉沢素山に学び、のち川辺御桶のもとで土佐派を学んだ歴史画家として知られています。代表作としては明治神宮壁画「大政奉還図」などがあります。



源平合戦絵図 収蔵場所: 香川大学博物館



香川大学図書館にて展示した時の様子